佐田氏研究（その二）

大隈米陽

(五) 城井宇都宮氏歴代

宇都宮系図に拠れば一世信房の弟に朝綱あり、筑後蒲池氏祖とある。その弟知家は筑前小田氏祖、その弟家政は九郎兵衛尉と称し筑前遠賀郡山鹿荘を領し山鹿氏の祖とある。

次弟重房野仲次郎。伊予守。下毛郡野仲郷津田見荘に封ぜられ長岩に城を築き子孫茲に居り、野仲、内尾、友枝氏の祖となつた。

次の政房は上総介。上毛郡山田郷四郎丸に居り八十町の地を領し、因りて山田氏と称し、山田、中摩、成恒、高野氏の祖となつた。

次の業政は仲津郡不動嶽城主で西郷氏祖。次興房は伊賀守。下毛郡下深水村城主深水秣氏祖。末弟道房は上毛郡広津城主で広津氏の祖とある。

宇都宮景房は信房の第一子。新左衛門尉。従五位下。薩摩守、法名道友、又安貞。安貞二年二月五日七十六歳にて鎌倉に卒す。母は六条関白基実の女とある。

景房の弟有房は笠間次郎左衛尉と称し、其子三河守範房、其子房長相ついで常陸国笠間の地を領していたが、建久二年通房は宇佐郡の地百町歩を房長に分与したとある。

有房の弟信政は剃髪して少僧正生西と称し文治二年正月七日信房の創立した上毛郡山内村如法寺座主となり如法寺氏の祖と

なつた。その弟家信（仲八屋氏祖）国弘（麻生白川氏祖）綱房（加来氏祖）康房（鹿島氏）景長（山田氏）何れも豊前要害の地頭として落付いている。

三世信景、従五位下、左衛門尉、建久五年九州四頭奉行となり、其後評定衆となり、剃髪して定空と号し、宝治二年十月三日鎌倉に於て病死した。法名義閑、母は西園寺相国公房の女とある。

四世通房には信範、範景、範貞の三弟あり、範景は三郎、壱岐守、入道して覚実と云い田川郡柳原名の地頭職となつている。

五世頼房、従五位下、大和守、評定衆、九州四頭奉行の随一とある。延慶二年六月十一日家督相続、剃髪して道暁と云い正慶二年七月朔日八十八歳を以て卒す。法名皈山、母は今出川公有女とある。城井郷本荘村に天徳寺を創立した。或は天徳寺は其長子冬綱の創立とも云われ、豊前宇都宮家の菩提所となつている。頼房に四人の弟が挙げられ、盛房（城井太郎左衛門尉）永仁五年奥州に封ぜられ、次を経房次郎左衛門尉と称す。正安二年七月一日頼房より筑前山麓に差遣せられ、正和五年二月従士三百二人を率い賊軍に降り伊予守に任ぜられた。経房の弟大和八郎左衛門尉は官軍に属し、末弟実景は興国元年頼房より四十町の地を分与せられた。中津竜王の宮（郷社闇無浜神社）社伝によれば、弘安四年蒙古来襲に際し、五月宇都宮頼房に院宣があり、急に大神の社に祈らしむ。よつて神主大和守義繁、神輿三殿を奉じ浜に行幸あつて敵国降伏を祈つた所、満願の夜、竜燈海上に輝き渡り西天に飛んだが、大風俄に起り賊船悉く覆没した。翌年頼房に勅諚があつて、本社末社共に修理があり、五月五日遷宮式を執行し流鏑馬を行つた。爾来これを例として毎年三月三日これを行う様になつたのである。（赤松翠蔭氏「下毛郡誌」岡為造氏「中津と黒田氏」）弘安四年は頼房廿三才の時に当る様である。

又宇都宮文書に延慶二年九州探題上総介北条政顕の下知状があつて、大和前司頼房の筑前国田河郡柳原名地頭職を確認しているのである。柳原名（田河郡大任村）は当時平家方であつた。板井兵衛尉種造の跡地として宇都宮信房が拝領したであろう事はこの下知状を見れば明瞭である。平家方の没官領は源氏党として功労ある武士に給付せられた事は吾妻鏡元暦二年七月十二日の条に

平家没官領、種道、種遠、秀遠等所領、原田、板井、山鹿以下所処事、被定補地頭之程者、差置沙汰人、心静可被皈洛之由、今日所被仰遣参州之許也。

とあるに依つても分明である。板井種遠の領していた城井、原田、大野三郷の地を宇都宮信房が拝領、爾后子孫継承頼房に至つた事も前記の下知状で想像出来ると思う。

城井郷が宇都宮氏累代の本拠となつたであろう事は、前記の文書記録を断片乍ら確認してよいと思われる。太田亮氏の大著「姓氏家系大辞典」に宇都宮系図一本を載せ信房の条に「文治元年豊前国城井郷地頭職となり来住、故に子孫城井を以て家号となす。文暦元年八月二日卒年七十九」とある事も信房以降連綿宇都宮氏が城井郷地頭職であつた事を裏書するものである。尚佐田庄地頭職に頼房が補任されたかどうかは明らかでない。

六世冬綱実は下野守護代宇都宮上総介貞綱の長子、頼房養つて嗣と為す。初高房後冬綱と改む。又守綱と称す。正四位下常陸介。鎌倉評定衆、法名宗閑。元弘三年七月皈順、延元元年二月尊氏来奔、冬綱又尊氏に降る、とある。鎌倉北条氏の滅亡から足利尊氏の謀叛となり南北朝戦乱と悲劇の繰返しとなるのであるが、冬綱は評定衆であり乍ら北条氏と末路を共にせず帰路とあり、恐らく尊氏と行動を共にしたのであろう。尊氏の西走するやその手に加わり、三月三日宇佐郡神楽嶽城（竜王城）を陥るとある。四年三月三日尊氏の側の濫賞からか、豊前守護職と為ると系譜にある。正平十四年（北朝延文四年）八月筑後鰺坂に於て官軍と戦い弟隆房を殺すとある。爾后二十一年（北朝貞治五年）三月三日七十八歳で京都に卒している。恐らく北朝尊氏側として終始したらしいが、冬綱の六人の弟の中、豊房は薩摩守、伊予の守護職、従四位下、建徳元年八月八日卒す。法諡萬真、大津城に葬る云々。官軍に属した。子無く西江遠江守景安三男景泰を養つて嗣とし、世々大津城を保つていたが、天正十二年左衛門尉豊綱に至つて滅んだ。その弟仲房能登守、楊梅氏祖、次の弟景忠は左馬頭、伝法寺氏祖、景忠の子貞清は求菩提山法印となり長順院と称した。子孫世々衆徒を率いて戦陣に臨む。始め大内氏に属し後大友氏に従う。而して常に宇都宮氏に隷すとあるので北朝方であつたと見える。

次の弟公景は佐田初祖と云われ、佐田庄地頭職を嗣ぎ城井谷管迫に居り、尊氏に属し正平七年戦死して居る。宇都宮文書に公景の文書が拾通も載つて居りその事歴は大分明らかである。別項佐田氏歴代に詳記する予定である。公景の弟師房も城井中務少輔を名乗り、師冬とも云い北朝方で尊氏に属して各地に転戦し、正平三年正月四条畷で戦死している。

太平記四条畷合戦の条に宇都宮遠江入道、仝参河入道、五百余騎にて高師直の手に属し楠勢と戦うとあるので、師房もこの手に加わつていたのであらう。却説豊前に於ける宇都宮一党は殆ど北朝方として終始している中で末弟の隆房は独り官軍に翻して北朝方を悩ましている。特に正平十四年史上有名な菊池武光の筑後川（大保原）の戦に於ては賊将少弐忠資、松浦吉種等を討取り殊勲をたてたが三十一歳を以て戦死した。征西将軍懐良親王はその忠魂を慰められ、肥後国木葉村に一祠を建て宇都宮大明神と崇め奉るとある。

明治四十四年に従四位を贈られている。隆房の墓は大保原にある。

冬綱に三子あり、長子を常陸介右保、友保の子大和守親綱は豊州駅館川の戦の大将。次子常陸介兵部少輔家綱は従五位下、法名義安、母は名和伯耆守の女也。建武三年京都並びに京都合戦の時官軍に属し、人数三千余騎、応安三年八月九日六十歳で京都に卒すとある。

末弟城井出羽守左馬助房家は、応永二年田河郡香春口に於て官軍と戦つて戦死とある。

宇都宮系図に拠れば冬綱の跡は家綱が継いだらしいが、家綱の子直綱は初名弥三郎、常陸介、播磨守、従五位下、家綱の跡を継ぎ、終始党方として勤皇の事に尽したのであるが、最近故稲葉倉吉氏の「豊後郷土史論集」の中に入江文書、吉川文書を引いて城井高畑城に拠つて武家方今川了俊の弟氏兼、大友の重臣田原氏能を迎へ撃ち九ケ月の激戦となつた次第が明らかとなり、又高畑城跡の位置も城井谷中に於て発見されている。

南北朝後半期に九州は、征西将軍宮懐良親王を載いた菊池氏の奮斗で宮方大いに振い武家方は屏息を余儀なくされたので、足利方建徳二年では有名な今川了俊を九州探題として太宰府に差遣し、その勢力の挽回を計ることとなつた。当時両豊の地

は菊池氏に度々席捲されていたが、豊後の大友氏は反覆常なく、了俊の下向するや又之に応じたのである。此時城井宇都宮家綱は建徳三年卒してをり、その子直綱が父の志を継いで南朝方として、応安七年正月に城井高畑城に宇都宮の全勢力を集めて籠城したのである。

了俊は大いに驚き直ちにその弟弾正少弼氏兼に重臣長井貞広を副えて之に向わしめ、又大友親世の旗本四家の随一国東城主田原氏能も攻撃軍に加担した。城井方も一族をあげて殊死血戦、仝年九月廿五日刀折れ矢つきて高畑城は陥落したのである。入江文書に田原氏能の軍忠状二通がある。

田原下野権守軍忠事、

依二宇都宮常陸入道謀反一、霜台御発向之間、急速可二馳参一之旨、依二仰下一、不レ廻二時日一、令二参陣一、自二去二月廿三日一、於二豊前御陣一、令二堪忍一、連日野臥合戦之時、親類若党毎度被レ疵畢、爰去八月廿八日夜、豊後国凶徒忍二上同国北浦辺花嶽一、構二城塁一、塞二豊後豊前両国通路一之間、事延引者、依レ可レ存二天下之御大事一、自二惣領大友方一、就二度々之注進一、可レ馳二向彼城一之由、以二霜台御意一、不日罷二向彼在所一、去九月六日曉、押二寄当城花嶽一、散々致二合戦一、親類若党数十人、雖レ被レ疵、同日対治仕、不レ移二時剋一、令二城井帰陣一、致二宿直一之処、同廿五日没二落一高畑城一之間、致二霜台御共一、馳二参当御陣八町嶋一所、御勢仕以下致二宿直一之段、顕然之上者、預二于京都委細御注進一、申二賜御感御教書一、為レ備二後代亀鏡一、粗言上如レ件

応安七年十月　　日

「承了　（今川了俊）花押」

常陸入道は直綱、霜台とあるは弾正台の唐名でここでは今川了俊の弟弾正少弼氏兼である。田原氏能は国東城主で大友氏の一族中の実力者で直ちに城井陣に参加したが、この人は正平二年父貞広の跡を継いでより南北朝統一まで活動四十二年に及ぶ。父祖の余功を受け其力漸く強大となり、武家方九州探題たる一色、斯波、渋川、今川了俊歴代の探題を擁して、豊後の主たる

大友氏、島津氏、少弐氏歴代が己を守るを先として領域を出ることが少なかつたが、之に反して田原氏能は大友の支族で又配下たる可き位置にあり乍ら武家方として終始九州の大舞台に出て各地に対戦したのである。遙かに京都と呼応して九州武家方の主力となつている。

文書中同国北浦辺花嶽は山香郷にある。国東と城井との通路を官軍方が塞いだと見え、氏能直ちに花嶽を攻め下し時刻を移さず城井に帰陣したとある。九月廿五日高畑落城に至るまで田原氏能大いに奮戦し、一族郎党の負傷者も多かつたのである。入江文書に豊前国城井陣合戦、氏能手物手負注文事とあり、三月三日、三月廿八日、八月十三日の部下負傷者十三名を書上げてあり、又前記山香郷花嶽合戦の負傷者十六人も書上げてある。激戦の連続であつた事がわかる。氏兼の部将長井掃部助貞広は遺言状迄記して先陣したのであるが、重傷を負う程の苦戦であつた様である。

入江文書に

豊前国城井合戦之時、自二最前一、令二在陣一及二退治之期一致二忠節一、親類若党数輩被レ疵候、尤神妙、此趣可二注進一之状如レ件

応安七年十一月六日　　沙弥　花押（今川了俊）

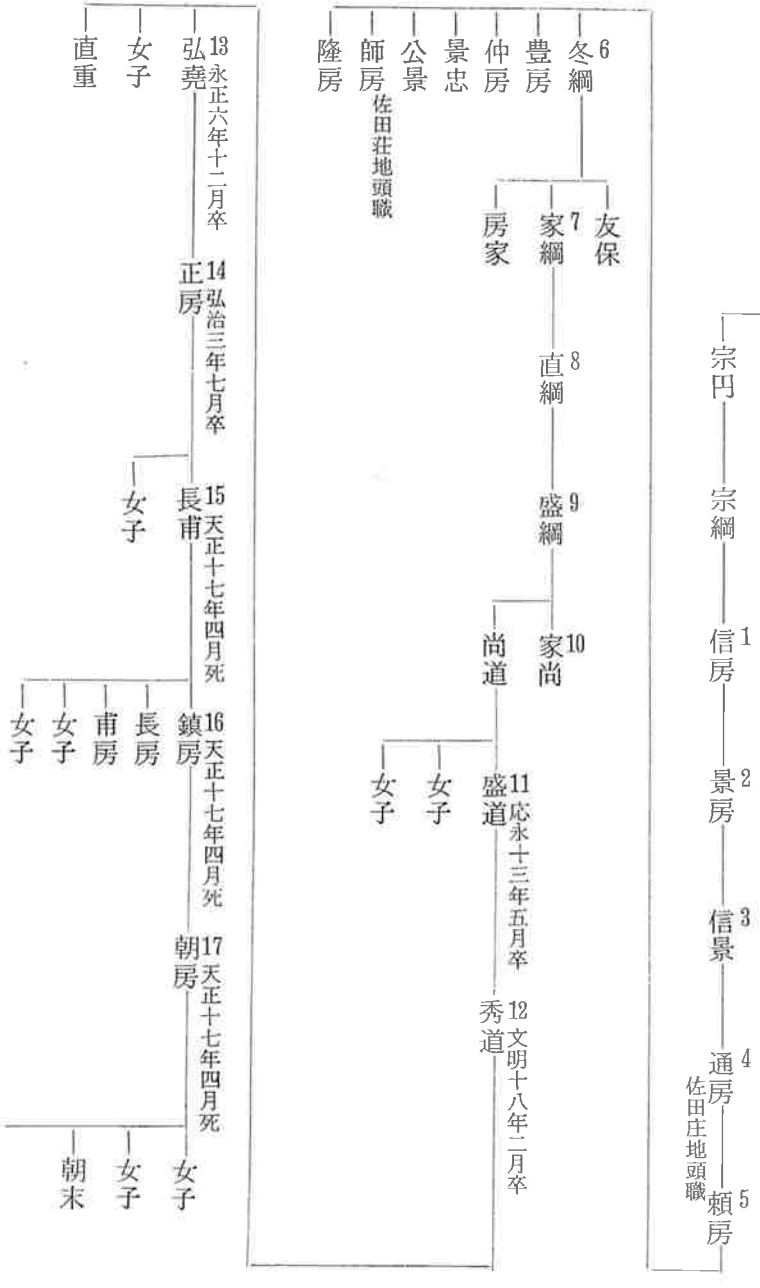
田原下野権守殿

とある。此外にも了俊から氏能宛の私信一通があり、その喜悦の状を察する事が出来る。

高畑城の戦は武家方と宮方の死力を尽しての激戦で宇都宮でも此の長い期間の悪戦苦斗の結果の落城であり、その損害は実に莫大なもので兵力も殆ど尽きたのではないかと思われる。宇都宮氏は大友氏と並んで守護職に祿せられその勢力も相匹敵すべきものがあつたと思われるが中頃より南北より挟撃をうけ漸次衰亡の道程を辿る様になつた様である。

尚この戦で宇都宮直綱は戦死したらしくなく、その歿年は応永八年頃ではないかと思われるので、此時は四十歳位の分別盛りであつたらしい。

城井宇都宮氏略系


藤原道兼
兼隆
兼房
宗円
宗綱
1 信房
2 景房
3 信景
4 通房 佐田庄地頭職
5 頼房
6 冬綱
友保
家綱 7
房家
直綱 8
盛綱 9
家尚 10
尚道
盛道 11 応永十三年五月卒
秀道 12 文明十八年二月卒
女子
女子
豊房
仲房
景忠
公景
師房 佐田荘地頭職
隆房
13 永正六年十二月卒 弘堯
女子
直重
14 弘治三年七月卒 正房
15 天正十七年四月死 長甫
女子
16 天正十七年四月死 鎮房
長房
甫房
女子
女子
17 天正十七年四月死 朝房
女子
女子
朝末

高畑城の戦はかくの如く九州に於ける両勢力の興廃に重大な影響を及ぼしたのであるが、その位置について稲葉氏は豊前郷土史編集に於て上城井村大字松丸に高畑の地名が残つてをり城地は速ノ内にあることを確認された。歴代鎮西要略に「其の城たるや、口狭くして内広し、形は瓢簞に似たるを以て、瓢簞城と名付く（亦曰く城井谷と号す）一夫固きを禦ぐときは、萬夫進み難き要害なり」。と。今地図によりて、其の地勢を按ずるに、此の上城井村の形勢が、丁度これに当るものと思われる。松丸を入口として、伝法寺辺は少しく広く、本庄に入る所は非常に狭く、山と山とが東西より相迫り中に城井川を通し一条の隘路をなしてをり、進んで櫟原、寒田に至つて広くなる。上城井村即ち城井谷を一つの城廓ともみられ、その入口咽喉の地松丸に城跡を構えて、今川、田原の大軍を九ケ月の長きに亘り支え得たのは誠に地の利を得たもので、当年を偲び感無量なるを覚えるのである。

直綱の子出羽守盛綱、従五位下弥六童名藤若丸、永和年中筑前博多に於て唐船を切取り家士多戦死とあるが不明、盛綱の子に民部少輔家尚あり、法名道珍、至徳三年三月二日卒す、六十歳、その子常陸介俊房、その子越後守俊明は応永十三年より秀直の後見となる。家尚の弟に左馬助尚直あり、法名宗保、応永九年十一月十六日六十九歳で卒す。尚直の子播磨守盛直、法名義長応永十三年五月十二日卒す。盛直の子秀直、従五位、下法名安永、文明十八年二月五日卒す。八十六歳。その子常陸介弘堯、初名興房、従五位下、法名宗仙、江州御陣の大将也、永正六年十二月二日八十六才を以て卒す。女子あり、彦山座主の室。次日向守直重文明十八年より正房の後見となるとある。太宰管内志、豊前志に引く所の紀井宇都宮系図に正房を秀直の子としてあるが、これは弘堯の子の誤りでなければ年代的に合わないし、順序を説明するに次とあるは弟或は妹の事と解せられるが、正房の次常陸介長甫とあるは正房の子とするが正しいのではないか。正房の生年文明八年と長甫の生年永正十四年は四十一年の距りがあるので、弟とするより子とすべきであり、然らざれば生年の何れかに誤りがあるかと思う。尚長甫卒するの年八十二歳とあるも七十二歳とすべきである。

豊後守正房、左馬助、従五位下、法名承永、文明八年四月十日生、母者大内義隆の女云々。義稙公時左陣也、一生之間戦場

に臨む五十七ケ度、遂不レ後レ敵、弘治三年七月五日卒、八十歳。

常陸介長甫、永正十四年八月一日生、永祿三年四月上洛、城井大蔵、赤隈両人供奉云々、小戦則自身無レ出、十九所城代、交為二大将一出陣、天正十七年四月廿二日卒、八十二歳。

民部少輔鎮房は長甫の子初名興房と称す。遠国近国自身出陣云々、天正十七年四月廿二日中津川の城に於て黒田長政の為に誅せらる。法名宗永云々、屍を城中に埋むとあり、宇都宮滅亡の悲劇の主人公である。異母弟に弥次郎長房、右近甫房、異母妹二人、吉賀江六郎、仲八屋藤右衛門に嫁すとある。

鎮房の子弥三郎朝房、天正十五年六月秀吉公九州征伐之時先手となる云々、仝十七年四月廿三日殿下の命により肥後国に於て清政の為に誅せらる。時に十九歳、法名宗伝、殿下朝鮮征伐の時清政先鋒と為る。朝房の怨霊祟を成す。之に依り清政帰朝之後慶長元年八月、彼霊を崇め宇都宮水神と為す。即ち肥後国木ノ葉郷ノ社是也、妹二人あり、朝房の子宇都宮治部左衛門朝末云々とある。

以上は城井宇都宮本家の歴代について太宰管内志、豊前志所引の宇都宮系図の要点を載せて若干私見を加えたのであるが、宇都宮氏初世一、二代は初め仲津郡城井郷(神楽城)に居住したらしくその一族郎党の子孫が残っているが後に築城郡本城村の城に居て、城井谷の奥である木ノ江を以て詰ノ城とす。故に城井氏と称し、初数代の間当国の守護たるに依つて国内に端城多く幡下にも大家あり一門は国内に竜蟠虎踞したのである。城井家記に一門の士で城代の名を挙げてある。

上毛郡山田城代　山田右近

中津西郷ノ城代　西郷刑部

馬岳城代　長野三郎左衛門　角田尾城代　賀来孫兵衛　上毛郡広津城代　広津角兵衛　川底城代　川底弥三郎、下毛郡津田城代城井五郎、日吉崎城代原田伊予、宇佐ノ立山城代真賀四六郎　宇佐竜王城代城井三郎兵衛、伝法寺城代伝法寺兵部、神楽城代白石加兵衛、田河郡岩石城代佐々木雅楽、九十谷城代九十谷玄蕃、香春城代高橋九郎、海老野城代遠山孫六、末松加

賀、上毛郡日野瀬定番渡辺右京、求菩提山定番塩田内記、友枝光明寺城代友枝忠兵衛、壱戸城代壱戸与平云々。

とあり。又城井斗争記には家臣の内重なるもの溝口伊賀以下百三十四名の名をあげてある。豊前一円に宇都宮一党が蔓つていた事はよし俗言であつても、既記の記録文書に夥しく散見するのである。

仲津郡、田河郡、築上郡にかけて社寺、古城跡に宇都宮氏とその一党に関係ある記事は挙げて数う可からざる程沢山ある。特に古城跡に於て著しい。天正十五年の秀吉の九州征伐に際し豊前の地は殆ど島津方に属していたであらう事は小倉、花尾、宮山、松山、香春嶽、障子ケ嶽、馬ケ嶽、城井、巌石、宇留津、広津、時枝、妙見、宇佐、竜王の諸城が秀吉の先鋒を勤めた毛利勢のために攻略され、降伏させられている。是等の要地には高橋元種（小倉）、長野種信（馬ケ嶽）、高橋元種（香春）賀来新外記（宇留津城）等宇都宮一党が拠守していたのである。

此の後に秀吉に対して宇都宮氏が如何なる態度を執つたかと云う事は従来両説があるのであるが、我々は当時の形勢から、或は戦局終了後宇都宮氏が領地を失い、黒田氏の為に討滅された事実から押して考えるに、どうしても宇都宮氏は積極的に秀吉の西征に賛成し行動を共にしたとは思われぬのである。

此点について稲葉氏の説が尤も妥当と思われるので、左に摘録したい。

倉城大略志の所説では「鎮房は宮川三昧と云う者を長州迄遣わし、浅野弥三兵衛、毛利小三治により秀吉に御目見仰付られ鎮房宗麟と共に薩摩案内御預成さる可く、小倉の津に上向申す可き由仰付られ候処、其節鎮房病気故、嫡子弥三郎朝房小倉に出向、薩摩に供奉仕る」云々、築上郡志、城井斗争記もこの説を承けているがこれは信じ難いのである。

否宇都宮氏は大友氏と行動を共にせず島津方に傾いていたと思われる事実の方が多いのである。

第一にはこの時に於ける宇留津城（椎田附近）の行動である。同城は是迄宇都宮氏の抱城としてその配下に属していた。城主賀来新外記は秀吉の西征にがん強に反抗したので毛利氏の吉川元長等のため攻落されている。徳富蘇峰の近世日本国民史豊臣氏時代乙篇四九毛利一家の努力の項中、

毛利輝元は天正十四年八月部将神田元忠に三千人を付して先発せしめた。神田隊は八月下旬関門海峡を越えて薩軍の与党高橋元種の属城小倉を攻めたが伏兵に陥りて苦戦し、又敵の後続隊の横撃するに遭い門司に退却した。九月下旬より十月上旬に至り吉川元春、小早川隆景、黒田孝高、毛利輝元以下総勢門司に集結し、十月四日小倉を抜き、続きて馬ケ岳城長野種信降り、筑前剱ケ岳、浅川、古賀の諸城、宮山、松山の諸城も降つた。十一月七日宇留津城を包囲し之を陥れ、斬首五百四十余級、俘虜男女四百余人、悉く之を磔殺した。（日本戦史九州役）秀吉の十一月廿日付吉川元長宛感状に

一、豊前宇留津城、去七日に責崩、千余首を被レ刎、其外男女不レ残、はた物に相かけられ候儀、心地よき次第候。手柄之段無二申計一候。殊敵方味方中、覚と云、御祝着之儀、難レ尽二筆紙一被二思食一候。とある。

毛利勢は十五日更に障子岳城を取つた。

更に香春嶽に向ひ攻撃二十日、其汲道を絶ち、強襲数十回、流石の高橋元種も十二月上旬開城した。其他上記筑豊の諸城皆風を臨んで降つた。是に於て吉川隊は香春嶽に、黒田隊は馬ケ岳に、小早川隊は松山に冬営を布いて秀吉本軍の来るを待つた。豊前の討取には毛利一家は総力を挙げ先駆者として、報効を尽したのである。

渡辺重春の「豊前志」宇留津村城跡の項に、

「油津日向守高衡居る、後、賀来新外記の子、孫兵衛元邦居る。後毛利勢並に黒田勢より攻め落されたり。豊前軍記略云、天正十四年冬、秀吉公先手小早川隆景、吉川元長、吉川経言、中国勢二万五千余騎を引率し、陣を寒田松山に替す。殿下検使黒田勘解由、亦其勢余人陣を移す。宗像氏景千五百余人を率ひ、中国勢に馳加はる。此時、馬岳長野三郎左衛門降人と為り、黒田の手に加わる。賀来一一類、築城郡宇留津城に楯籠る。是に於て元長、隆景、使を遣わして降参を勧む。加来与次郎、同新右衛門、同孫兵衛等父入道専順人質として高橋居城賀春に在るの間、降参す可らざる旨返答す。之に依り十一月七日鶏鳴之頃、中国勢、並黒田、長野、宗像等、都合二万八千余騎松山を打立、同日辰刻、宇留津に着陣す。此城、東者海水也、南北之間者深田也。之に依り、黒田、長野、南方より、小早

川は北方より吉川は西方より、各陣を分ちて押寄す。

此時元長、経言、父元春之病気に因り、松山より小倉に引退く。宇留津の攻口に於ては、元長の名代として宮庄太郎左衛門春実を遣はす云々。討取る所の首、一千余級、焼死する所は真を知らず。生虜る所之男女四百余人悉く之を磔す。是に於て黒田、賀来二人の首を桶に入れ、討取る者の姓名を記し、之を大阪に送る。同九日、諸軍皆松山城に入る云々。」

果してこの通りであつたとすれば色々な疑問が起る訳である。斬首一千余級と云ひ四百人磔殺という、眇たる孤城にしては籠城士卒の人数が多過ぎる感がある。恐らく加賀新外記のみに非ず、島津方であつた豊前各城の敗兵が集結したのではないか。さればこそ秀吉方も二万幾千の軍兵を差向けて短日月の間に血祭りに挙げてせん滅作戦に出でたと思われる。文字記録の表裏から惨状其比を見ないのである。宇留津城主の態度は其儘本主たる宇都宮氏の態度ではなかつたかと考えられる。

第二に陰徳太平記によると天正十四年三月大友宗麟は豊後を出発して、四月朔日、大阪城に於て秀吉に謁見している。その時、宗麟が秀吉に言上したる意見の大要が同書に出ている。九州に於て島津の北上に対して之に対抗の勢を取つてをるのは我が大友と立花左近将監宗虎、高橋主膳入道紹運、筑紫広門の三人許りである。殊に島津が竜造寺隆信をたおしてから後は、秋月、長野の諸氏に至る迄も、皆島津の墓下に属してしまつたと述べている。宗麟にも秀吉西征の実現は即ち宗麟旧領の恢復にもつながるので色々に馳引もある事と思われるが、九州は一部を除き殆ど島津氏の麾下に属し、雄族宇都宮氏一党も恐らく款を通じていたに相違ないと思われる。

第三に豊臣秀吉譜の記事である。天正十五年三月末、秀吉本軍は関門海峡を渡り、部署万端を定め、廿九日馬ケ岳なる長野種信の城に入つた。然して田川郡巌石城の攻略を蒲生、前田の両人に命じた。巌石城は秋月の屬城で熊谷久重、芥田六兵衛等三千の兵で立て籠つた。馬ケ岳、巌石両城共城井を距る数里の地点にある。蒲生、前田両将は四月一日城に迫り、突撃、火を風上に放ち、城兵の死者四百余人、全日午後四時全く陥落した。秀吉も終始督戦した。この堅城の陥落により老猾秋月種実も四月三日剃髪して降を乞うた。爾后秀吉本軍は無人の野を行くが如く薩摩に入つたのである。この巌石城の戦局に及

ぼした影響は徹底的であつたと見え、秀吉譜に、巌石城、彦山の処置を終りたる後に記して、

「西州諸城望レ風西逃、…秀吉曰遠方絶域、不レ泄二一人一誅レ之、云々。即揚言曰、是度逃散之城主、吾悉宥レ之、其当二速来一聞者喜曰、是固仁政也、乃往執レ謁者……秀吉或賜二旧領一或否」とあつて豊筑の諸城主の名を挙げた中に城井一門中、草野長野、中八屋、高橋、安心院、伏田、城井弥三郎の名が見えるのである。甫庵太閤記にも同様の文字がある。城井弥三郎は即ち宇都宮朝房であるから巌石城陥落して九州全局の大勢が見えてから後に始めて秀吉の軍門に謁を執つているのである。当時豊前一円の地は島津の威風に服していたであろう事は以上の断片的記録によつても明瞭であると思う。随つて九州征伐終了後の論功行賞に於て豊前八郡の地が黒田長政と毛利氏に分割され、宇都宮氏は取除かれ所謂旧領を賜うに非ず「或否」の処置を取られたのであろう。伊予へ国替されて、そのため鎌倉以来の名家の没後座視大来　として反抗したとの俗説は取るに足らぬと思われる。秀吉に対して態度不鮮明であり首鼠両端を持した事自体、両強の間に跨つて身を全うせねばならない地方豪族の悲劇的宿命とは云い乍ら、当然の成行と云わねばならない。

その中で前記宇留津落城の悲劇は宇都宮没落の悲劇と共に私共郷土人の涙を誘うのである。此の時降つた城主中、佐田とあるは十六世佐田弾正忠鎮綱であつて、領地を失ひ浪々の身となつたが、その息子統綱は細川氏に随つて熊本藩士となり、明治維新に至つた。佐田文書三百通が伝来されている所以である。以上佐田氏研究が若干横道に入り城井宇都宮氏の歴代を調べて見たのであるが根本資料に乏しくこの程度の素描に終る始末である。

（以下次号）